

中村(2008)は、ハロッドの経済学・哲学・倫理学を統一的に捉えるために、彼の思想を「動態的功利主義」と名付けた。そこには、1)ハロッド独自の動態理解、2)質的な価値を重視した功利主義、そして 3)既存の価値評価システムからの自由という、ハロッドの思想の核心がすべて盛り込まれている。本報告では、それらを再整理し、彼の問題意識を明確にし、さらにその意義を明らかにしたい。

1. ハロッドの「動態」理解

ハロッドは、基礎条件に合致する均衡状態を分析することを「静態(statics)」と呼んだ。一方、何かが変化しているとき、それを成長率で表現し、その背後にある基礎条件の変化(成長)を、その変化を起こしている原動力とともに分析することを、「動態(dynamics)」と呼んだ(Harrod (1948), ch.1, Harrod (1973), ch.1)。

ハロッドの「動態」理解は、通常理解とは異なる一均衡までのプロセス、均衡から均衡への動き、タイムラグに基づく変動は、彼によれば「動態」の守備範囲ではない。彼独自の動態観は、有名なハロッドのマクロ動学(ハロッド=ドーマー・モデル)に表れている。資本蓄積と有効需要の成長がかみ合った保証成長率という概念を中心に、「保証成長率の不安定性」と「保証成長率と自然成長率の不一致」という問題が論じられている。

このマクロ動学理論が有名なため、「ハロッドの動態論=ハロッドのマクロ動学」と考えられがちである。しかし、ハロッドの思想を「動態性」という特徴によって統一的に理解しようとするならば、彼の動態論をより広いものと捉えた方がよい。

そのために、ハロッドが動態理論の例として、リカードを挙げていることが、参考になる。ハロッドによれば、リカード理論の核—リカード理論が動態的である由縁—は、変化を起こす原動力への理解である。より具体的には、産業資本家への利潤分配が資本蓄積の原資となり、それが経済全体を成長させるのである。原動力の解明にとって重要なことは、「誰に分配すれば、それを成長のために使ってくれるか」である。この観点こそ、ハロッドの思想—動態的功利主義—を貫く基礎である。

2. ハロッドの功利主義

ハロッドの時代において、倫理学説としての功利主義には、逆風が吹いていた。ムアの善の直覚説によれば、功利主義は「自然主義的誤謬」ということになる。また、論理実証主義を突き詰めれば、倫理的な判断は感情的ノイズということになる(Ayerの情動主義)。しかし、ハロッドは、倫理学説としての功利主義、とくにJ.S.ミルの功利主義の正しさを確信していた。倫理判断が根拠なき「直覚」に委ねられることも、相対主義に陥ることも、

ハロッドには認められなかった。われわれが共に生きる限り「価値」についての理解を積み上げてきたはずだし、それを守るための道徳感情(moral sentiments)が存在することは、明白である。学問の世界がその文明の基礎たるものを、いい加減に扱うこと一直覚や主観によるものと見做すこと一は許されない、とハロッドは考えていた。

ハロッドの功利主義の特徴を、二点に分けて考えておこう。

1) 規則功利主義の強調、道徳感情との結びつき

功利主義に対するよくある批判として、「効用の和を大きくする行為ならば、ある部分に犠牲を出しても善なのか？」というものがある。この種の批判は、その行為が一般的に行われてもなお功利主義の基準を満たすのかを考えれば、多くは回避される。従って、功利主義は、「ある行為のルールが守られれば、効用の和を大きくするか」という基準で倫理的判断をすることになる。Harrod (1936)は、この点を明確にした。後の言葉で言えば「規則功利主義」である。

有益なルールを全員（あるいは大多数）が守れば全体の利益になるような場合、そのルールを守ることは功利主義の観点から善である。ただし、ルールに従う行為の一回一回において、つねに結果としての公共の利益を意識して行われるものではない。ルールは、歴史的な実践のなかで、慣行(convention)として成立している。そして、ルールを守ることと道徳感情が結びつき、自然化される。

2) 効用の個人間比較

功利主義は「効用の総和」を最大化することを善とみなすので、当然、個々人の効用を足し算できるのか、という根本的な疑義が付きまとう。効用の個人間比較は、実証科学の上では不可能であると述べたロビンズに対して、ハロッドは反論している(Harrod (1938), pp.395-7)。社会の研究に不必要に科学的な厳密性を持ち込む必要はなく、常識に基づいて比較をすればいい。道徳的判断において差異があるとは認められない個人は、同じ満足享受能力を持っていると想定して構わないのである。

しかし、ハロッドは、すべての個人が道徳的に同等と扱われるべきとは考えない。むしろ、効用に質的な差異があるという J.S.ミルの考え方を、積極的に受け入れている。つまり、高度な喜び（質的に高い効用）を享受する能力を持った人間と、そうでない人間がいることを、前提とするのである。

規則功利主義に適うルールが道徳感情と結びつき、慣行となって定着するという話は理解しやすい。そこで想定されている個々人は対等だからである。だが、効用の質的差異と満足享受能力の不平等を前提とする功利主義が、人々の倫理基準として定着するのは、かなり理由づけが必要である。なぜなら、総和の計算において、満足享受能力が低い人には理解できない高度な喜びが大きなウェイトで加算されるからである。また、倫理的に望ま

しい分配を考える際、満足享受能力の高い人に多くを分配することが、功利主義の基準に
適うことになるからである。これが、一般に受け入れられる倫理基準になるとは、容易に
は思えない。だが、ハロッドは、動態性を考慮することによって、この満足享受能力の不
平等を含む功利主義を、擁護するのである。

3. 動態的功利主義

ハロッドは、功利主義に基づき、質の高い価値を創造・享受する階級—上流階級—に、
所得と富を多く分配することを肯定する。だが、それは、一時点の効用の総和を最大化す
るためではない。上流階級が創造と享受の能力を継承し、さらに創造する役割、つまり価
値を生み出すエンジンの役割を果たしているからである。そして、その創造と享受の能力
は、ゆっくりと中下層階級へと波及していく。この創造と波及を通じて効用の総和の「最
大成長率」を達成することが、ハロッドの功利主義の基準であり、私が「動態的功利主義」
と呼んだものである（中村(2008), 第2章3, 第7章6）。

誰が価値創造の中心である上流階級は、知性と判断能力を備え、範となる人間性、生活
スタイル、芸術・文化の創造および享受の能力を持った人間である¹。では、誰がこの上流階
級になるのか？ 経済競争の勝者がこれらの能力を持っているならば、競争の結果を肯定す
ればいいだけである。しかし、上流階級に必要な洗練された能力は、経済競争で勝利する
能力とは違う。ハロッドは、洗練された能力は、家系によって父から子へと継承される—
遺伝と後天的環境の双方で—と考えている。世の中にある多様な選抜システム—経済競
争・教育選抜・組織内の出世ルールなど—があり、できるだけ能力の高い人間を上位に引
き上げるように作用しているが、洗練された能力を持った人間を選抜するには不完全なシ
ステムである。よって、過去から継続して上流階級に位置する人々と、不完全な選抜シ
ステムによって上流階級に補充される人々によって、世代を超えた能力継承および成長が担
われるのである。彼らは、経済競争や制度的評価によって富を拡大させるかもしれないし、
そうでないかもしれない。しかし、大事なことは、彼らが経済競争や制度的評価における
既存の基準に従う必要がないことである。財産と身分の保障があり、何ものにも生き方を
干渉されない自由を持っているのである。

洗練された価値を守り、成長させる環境として、自由＝自律性が重要であることに関連
して、付け加えておくべきことがある。ハロッドは、上流階級が財産保有者として自由を
保持していることと同時に、大規模な財産を持つ団体—大学など—が、経済競争や政府権
力から独立し、自由な価値創造の拠点となることを重視していた。これは、ケインズの「自
由放任の終焉」(1926)を想起させる。ケインズは、そこで、中間組織（市場と政府の間）に
公共的価値を担わせる方向—中世的な分権的自治—を、進歩と呼んだ。

¹ 特権的な地位にある少数者は、「風格(tone)を維持し、正しい思考のコードを確立してき
た」のであり、富裕でないそれ以下の人々は、少数者の確立したものを基礎に生活してい
るのである(Harrod (1948), p.148: 訳 200 ページ)。

既成の価値基準では多くの価値が測れないというハロッドの認識は、財産保有者や自治的基金の重要性だけではなく、より広く、他者には既存の尺度では測れない固有の領域—個性あるいは魂(soul)—があるという認識にもなっている(Harrod (1956), ch.11)。そこから人間を対等に扱うマナーや、創造のために多様性を混合する必要性が語られる(Harrod (1948), p.156: 訳 210 ページ, Harrod (1971), ch.2)。

最後に、価値の波及について述べておきたい。効用の総和の最大成長のためには、洗練された価値の継承・創造だけではなく、その波及も必要である。波及は、範となる価値観・生活スタイルの普及と、教育を通じた能力の伝播によって起こる。後者の教育による波及速度は、人為的にコントロールできるものだが、非常に遅い²。洗練された価値は主として家系を通じて継承されるものであり、家系の外への継承、つまり教育による継承は、難しいからである。優れた教師を生み出すために、非常に多くの時間と資源を費やさなければならない。それでも、ハロッドは、教育を通じた価値の波及に、大いに力を注ぐべきだと考えている。

4. 失われしイギリスの栄光

ハロッドは、どのような問題意識をもって、以上のような「動態的功利主義」の主張をしたのだろうか？ 彼は、過去のイギリスの栄光を取り戻したかったのである。かつての最高のイギリスは、単純化すれば、次の三層構造からなっていた。洗練された価値の担い手としての上流階級＝大土地所有・金利生活者・地位の高い職業、努力と創意によって経済的進歩をもたらした、上流に近づこうとする中流階級＝産業の主導者たち、勤勉で従順な下層階級＝単純労働・サービス職、の三層である³。

だが、両大戦を経て、この三層構造による強国イギリス—洗練された価値の継承・創造と経済的進歩が両立していたイギリス—は、大きく衰退した。産業力においてアメリカに劣り、それが両大戦におけるアメリカへの依存となり、イギリスの優越と支配の構造は崩れた。イギリスの覇権とともにあった金融所得が失われ、上流階級が金銭面から衰えていった。一方、第二次大戦後の福祉国家・完全雇用政策という路線は、労働者階級の権利と平等の要求を強め、伝統的な道徳律に支えられた支配・従属の関係を変えた。経済的進歩を取り戻さなければ二流国に転落するけれども、中下層の力を引き出して経済的進歩を成し遂げようとするならば、上層階級を滅ぼすことになりかねない。これが、ハロッドの直面した状況である。

この問題意識がもっともよく表れているのが、『動態経済学序説』(1948)の最後の部分に

² 「教育は重要であるけれども、急すぎると標準が崩れる可能性がある。もし、多数の人々が教育を高めようとするならば、十分な数の教育者が発見されなければならないし、教育者自身が従来よりも高い水準まで教育されなければならない。戦時中におけるパイロットと同じく、その拡張可能率には制限がある。」(Harrod (1961), p.11: 訳 14 ページ)

³ この構造こそが「ハーヴェイ・ロードの既定観念」—イギリス帝国の安全とよき秩序に依存するもの—である(Harrod (1951), p.80: 訳(上)94 ページ)。

ある「金利生活者の安楽死」への意見である⁴。ハロッドは、ケインズが提唱した金利生活者の安楽死＝利子ゼロの世界を肯定する。寄生的所得が累積することによる不平等がなくなり、富への道が実業上の成功＝利潤の獲得になれば、利潤という所得と利潤動機そのものを人々は尊敬・称賛するようになる。また、利子ゼロであれば、過剰貯蓄に対抗するマクロ政策として、負担なき公債発行が可能になる。だから、利子ゼロは正しい。だが、これまで金利生活者が果たしていた社会的役割、つまり上流階級として洗練された価値を継承・創造という役割が失われることにも、注意を払わないといけない。そこで、ハロッドは、相続税の大幅軽減（あるいは廃止）による上流階級の維持、および土地資産が大学等の自治的な教育機関に集中するような土地法を提唱するのである。

ハロッドは、上流階級による洗練された価値の継承・創造を何よりも重く見ていた。産業力においてアメリカに劣り、リアル・ポリティクスの世界で覇権を奪われたとしても、文明においてアメリカに劣るとは全く考えられなかった。だからこそ、淘汰プロセスを経て生き残っているものが正しいとする「プラグマティズム」には、断じて与しなかった⁵。そして、イギリスの栄光を取り戻すため、これまで暗黙にしか存在していなかった階層構造とその相互利害関係を明るみに出だし、再建しようとしたのだ。上流階級による洗練された価値の継承・創造の役割を明らかにし、その責任を自覚させようとした。さらに、選抜と価値波及のシステムをより工夫することで、下位が上位を尊敬すること、そして富の秩序に正当性を見だし、富を求める動機を持った人間に対しても尊敬の念を取り戻そうとしたのである⁶。

5. ハロッドの議論から得られる論点

以上のようなハロッドの「動態的功利主義」についての議論から、私は、学説史・経済思想史上の興味深い論点を二つ引き出したい。

1) 動態的な経済倫理

ハロッドの「動態的功利主義」は、効用の総和の最大成長率を達成するために、価値創造のエンジンとなる人々に富を託す。誰かに託すことによって、それが長期的な将来において、結果的に全体の利益になる。これは、価値創造を託された上流階級とその恩恵の波及により利益を受けるそれ以下の階級の間、いわば長期的な互惠性である。

経済という分業システムのなかで、相互に利益を得つつ、その背後に相互の共感と尊重

⁴ Harrod (1948), pp.145-158: 訳 195-214 ページ。

⁵ Harrod (1971), p.8. ハロッドのプラグマティズムへの批判は、表面的には、帰納法の証明を放棄している点にある。しかし、その奥底にある理由は、それを放棄するとたんに自然淘汰の過程で生き残ったものが正しいことになってしまう、ということだろう。

⁶ ハロッドの理想とする社会構造の対極を示せば、分かりやすいだろう。それは、利潤は搾取、相続財産は不正とみなし、富・所得・権利の平等を無限に要求する大衆が支配するデモクラシーである。

があるとしたアダム・スミスの考え方は、経済と倫理を結び付ける一つの重要な型である。しかし、これはプレイヤーの対等性と時間を含まない交換関係のなかにある、いわば水平的な経済倫理である。一方、ハロッドの経済倫理は、対等でないプレイヤーどうしの長期的な互恵性を問題としている。

2) カネと価値のズレ

ハロッドの功利主義は、効用の質的差異を認め、質の高い効用を享受する能力を持つ者と持たない者の差異に基づいて、富・所得の分配を考える。問題は、高度な享受能力を持つ者と、経済競争における勝者が一致しないことである。価値あるものを創造できる人が、同時に高度な享受能力を持っているとは限らない。また、市場において高く評価されるものが、洗練された高度な価値であるとは限らない。よって、効用の質的差異を認める限り、経済競争の結果をそのまま肯定することはできない。経済学者は、文明の受託者ではなく、文明の可能性の受託者なのだ(Harrod (1951), pp.193-4: 訳 223-4 ページ)。

この問題についてのハロッドの答えは、既成の価値基準から自由な存在を肯定し、そこに積極的に富を分配することであった。具体的には、財産保有者と自治的基金に対してである。自由企業競争を通じた経済システムとは別の、多元的な価値創造を構想したとあってよい。だが、もちろんこれが完全な答えではないだろう。「カネと価値のズレ」は普遍的な問題であり、諸学説・思想で論じられている。この問題、特に「カネ」と「価値」をどう結びつけるのかという問題に、どのような類型があるかは、学説史・思想史の重要な論点であると思われる。

参考文献

- Harrod, R.F. (1936), "Utilitarianism Revised", *Mind* 45, April, pp.137-56.
- (1938), "Scope and Method of Economics", *Economic Journal* 48, Sept., pp.383-412.
- (1948), *Towards a Dynamic Economics*, London: Macmillan.(高橋長太郎・鈴木諒一訳『動態経済学序説』有斐閣、1953年)
- (1951), *The Life of John Maynard Keynes*, London: Macmillan. (塩野谷九十九訳『ケインズ伝』(上・下)、改訳版、東洋経済新報社、1977年)
- (1956), *Foundations of Inductive Logic*, London: Macmillan.
- (1961), "The Possibility of Economic Satiety", in *Topical Comment*, London: Macmillan, pp.7-12. (塩野谷九十九訳「経済的飽満の可能性」『景気変動と国際金融』東洋経済新報社、1963年、9-15ページ)
- (1971), *Sociology, Morals and Mystery*, London: Macmillan. (清水幾太郎訳『社会科学とは何か』岩波新書、1975年)
- (1973), *Economic Dynamics*, London: Macmillan.(宮崎義一訳『経済動学』丸善、1976年)
- 中村隆之 (2008) 『ハロッドの思想と動態経済学』日本評論社。